様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４４３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４４７３

研究課題名（和文）自閉症スペクトラム児に対する新しい支援法の開発-アタッチメント理論に基づいて-

研究課題名（英文）Effects of an Attachment-Based Parent Intervention on Children with Autism Spectrum Disorders

研究代表者
久保　信代（Kubo, Nobuyo）

関西福祉科学大学・心理科学部・准教授

研究者番号：４０４４９８４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：自閉症スペクトラム症(ASD)児とその養育者への新しい支援方法としての適用を目的に、アタッチメントに視点をおいた「安心感の輪」子育てプログラム(COSP)の有効性を非ランダム化対照比較により検証した。合計60組の親子が本研究に参加した。効果検証は介入前、終了6ヶ月後、終了12カ月後の質問紙調査の結果を分析した。介入終了6ヶ月後の調査結果からは、COSPによる介入がASD児の母親の育児効力感を高め、精神健康度を改善し、わが子の行動に関する主観的な困難感を低減しうることが示唆された。その効果は介入終了1年後も持続することを検証した。これらの結果を国際誌、および国内外の学会に発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、アタッチメント理論に基づくCOSPがASD児親子に対して有効であることを実証した点にある。これにより既存のASD支援に加え、新たな早期介入や家族支援の方法として提案することが可能となり、支援の質や彼らの生活の質の向上、より健全な発達を支援できる可能性を示すことができた。さらに、本研究の対照比較検証の結果は、欧米で開発されたCOSPが日本でも有効であることを支持し、アタッチメント介入が国を超えて有効であることを示すエビデンスを提供することとなった。またアタッチメント介入に関する知見を提供したことは、日本の将来のアタッチメント研究やASD研究において価値のある基礎資料となり得る。

研究成果の概要（英文）：Caregivers of children with ASD often face difficulties in responding appropriately to their needs, who typically express attachment in distinct and nonconventional ways. Circle of Security Parenting (COSP) is designed to increase caregivers' sensitivity to their children's attachment needs. The aim of this study was to verify the effectiveness of COSP in mothers of children with ASD through a non-randomized control trial. We conducted assessments before the intervention, at six-month, and at one-year post-intervention to evaluate the outcomes of the intervention. The result indicated COSP effectively improved parenting self-efficacy and mental health while reducing difficulties related to children's behaviors in mothers of children with ASD. These improvements were maintained at the one-year post-intervention follow-up. Our findings provide support for the effectiveness of attachment-based program for mothers of children with ASD.

研究分野：臨床心理学

キーワード：アタッチメント　自閉スペクトラム症　親子関係支援　「安心感の輪」子育てプログラム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

子どもの健全な発達には安定したアタッチメントの形成が重要である[1]。社会的コミュニケーションに障害を抱える自閉スペクトラム症(以下 ASD)児は、その特異的な対人反応の様式からアタッチメントを欲していないように受けとられがちだが、実際には養育者との間に安定したアタッチメントを形成することが可能である[2]。しかしその割合は非 ASD 児よりも低い[3]。

ASD 児の安定したアタッチメント形成を阻害するリスク因子として、ASD 児の知的な遅れや ASD 症状の程度[4]、養育者の敏感性や洞察性の問題[5,6]、診断後の養育者の葛藤[7] 、養育者の育児ストレスやメンタルヘルスの問題[8]が報告されている。それらの影響によって安心感の獲得が阻まれると、恐れや不安からの心身の調整が困難になり、ASD 児の健全な発達に悪影響が及ぶ。

頼れる存在に接近することで安心感を得るアタッチメントは、すべての子どもの心の発達に必須の要素である。しかしながら、これまで ASD 児への臨床的支援は障害特性の理解に主眼を置いた心理教育を中心に展開されてきており、ASD 児のアタッチメント欲求について十分に対応されていなかった。従って、ASD 児には親子双方への関係性を重視した支援が必要である。

親子の関係性を重視したアプローチの一つに、Circle of Security Parenting がある[9]。これは、子どものアタッチメント行動への養育者の敏感性を高めることを目指した心理教育プログラムである。欧米では、シングル、貧困層、産後鬱の母親など、不安定なアタッチメント形成への高リスク群を対象に実践されており、子どものアタッチメントの改善、行動や情緒の問題の改善[10]、養育者のうつ症状、養育効力感の改善[11]といった有効性が報告されている。我が国においては、Circle of Security Parenting は日本語版である「安心感の輪」子育てプログラムとして紹介されており[12]、日本人親子に対する有効性も検証されている[13]。しかしながら、本プログラムの ASD 児を対象とした実践の有効性は判っていなかった。

そこで、ASD 支援の新しいアプローチとして、定型発達児向けに開発された「安心感の輪」子育てプログラム（以下、COSP）をベースに、これまで見過ごされがちであった ASD 児のアタッチメント欲求に着目した新しい親子関係支援の方法を検討した。

2. 研究の目的

1) COSP を ASD 児の養育者に実施する。母親の育児効力感、母親の精神症状、子どもの情緒や行動の問題について、プログラム終了後 1 年間まで追跡調査を行い、アタッチメント理論に焦点を当てた親子関係改善への有効性を明らかにする。
2) ASD 児親子の関係性支援へのアタッチメント理論に基づいたアプローチの有効性をより高めるための具体的な支援方法を明らかにする。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン：非ランダム化対照比較デザイン
2) 対象：4～12 歳の ASD 児の母親 60 名（介入群 20 名、対照群 40 名）。募集は介入群と調査のみ参加の対照群を独立して行った。対照群については子どもの各年齢層の人数構成、男女比、発達・知的水準、通院有無の 4 点が介入群と近似するよう対象を選抜した。
3) プログラム実施：介入群には COSP（各 90 分/8 週間）をグループ形式（4～6 名）で実施した。対象が多様な状態像を示す ASD 児であることから、個別に事前アセスメントを実施し、親子の相互作用の観察、および母親へ面接によって親子が抱えるアタッチメント形成の課題を見立て、支援計画を立てた。また、COSP 内容の日常生活への汎化への支援の必要性を考慮し、プログラム終了後 1 ヶ月、6 ヶ月、12 ヶ月に 3 回のフォローアップセッションを

実施した。ここではわが子の欲求への気づき、対応の工夫、困難さを報告し合う場とした。

4） 効果測定：COSP は養育者に働きかけるプログラムであることから、本研究では母親の主観的な変化を評価することとした。母親に関しては養育態度や精神健康上の問題の変化、子どもに関しては母親の視点からのわが子の情緒と行動の問題の改善に着目した質問紙調査を行った。使用した尺度は、母親の育児効力感; Tool to Measure Parenting Self-Efficacy（TOPSE)、精神症状; GHQ30(GHQ)、母親の視点から評価した子どもの情緒や行動の問題; 子どもの行動チェックリスト（CBCL）である。介入群には１回目 COSP セッションの直前（Time 1：以降、T1)、および COSP 終了 6 ヶ月後（T2)、COSP 終了 12 ヶ月後（T3）に、郵送にて調査を依頼し回収した。対照群に対しても介入群と同じ質問紙を用い、同時期に調査を行った。回収率は 100%であった。

5） 分析方法： 各尺度の得点を共分散分析（ANCOVA）によって比較した。

6） 倫理的配慮： 本研究は研究責任者の所属機関の倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

1） 結果

① 研究参加者：研究参加者の T1 における性別と年齢について、表１にまとめた。介入群の参加児童の平均年齢は 7.3 歳、対照群は 7.5 歳であった。男女構成は、介入群は男児 15 人（75%)、女児 5 人（25%)、対照群は男児 31 人（77.5%)、女児 9 人（22.5%）であった。性別、年齢、通院、療育、薬物治療など、両群の間にここに示す複数の特性に有意な相違が見られないことを確認した。母親の平均年齢は介入群では 40.6 歳、対照群では 39.1 歳であった。

表１. 参加者の年齢、性別、治療的介入

		介入群 (*n* = 20)		対照群(*n* = 40)	
		Number	(%)	Number	(%)
対象児					
性別	男	15	(75.0)	31	(77.5)
	女	5	(25.0)	9	(22.5)
年齢		7.3	(2.40)	7.5	(2.12)
通院		13	(65.0)	29	(72.5)
療育		17	(85.0)	33	(82.5)
薬物治療		2	(10.0)	5	(12.5)
母親					
年齢		40.6	(4.32)	39.1	(4.86)

② 効果検証：TOPSE 総合得点、GHQ 総合得点、CBCL 総合 T 得点のいずれも、群間・時期間の交互作用の有意性を示した（表２）。各測定結果の群内比較をみると、TOPSE 総合得点では介入群にのみ T1-T2、T1-T3 間で改善が認められた。GHQ 総合得点の群内比較に関しては、T1-T2 間で介入群に改善が見られ、対照群では悪化が認められた。介入群の改善は T1-T3 間でも認められた。CBCL 総合得点の群内比較に関しては、T1-T2、T1-T3 間いずれにおいても介入群に改善を認めた。内向 T 得点においても両期間にわたり介入群に改善が認められた。

表2. 2群の介入効果の量的検証結果

尺度 群	データ: 平均値 (標準偏差)			群 × 時期 交互作用		効果量	T2 - T1	T3 - T1
	T1	T2	T3	*F* (2, 114)	*P*-値	Partial η^2	*P*-値	*P*-値
Tool to Measure Parenting Self-Efficacy (TOPSE)								
総合得点				14.250	0.000 ***	0.200		
介入群	257.65 (44.72)	306.15 (50.45)	304.80 (44.97)				0.000 ***	0.000 ***
対照群	281.40 (52.60)	288.10 (58.88)	278.25 (60.62)				0.161	0.699
GHQ精神健康調査票 (GHQ-30)								
総合得点				7.345	0.001 ***	0.114		
介入群	10.25 (5.92)	7.60 (6.93)	6.75 (5.40)				0.039 *	0.008 **
対照群	7.63 (5.51)	10.13 (6.13)	8.88 (6.06)				0.003 **	0.202
子どもの行動チェックリスト (CBCL)								
総合T得点				4.610	0.012 *	0.075		
介入群	69.75 (8.79)	66.75 (10.04)	65.65 (8.47)				0.004 **	0.000 ***
対照群	67.98 (6.76)	68.35 (6.86)	67.10 (6.03)				0.640	0.106
内向T得点				3.882	0.023 *	0.064		
介入群	66.55 (7.63)	63.65 (8.79)	62.70 (8.07)				0.031 *	0.003 **
対照群	63.53 (6.26)	64.95 (6.29)	63.45 (6.08)				0.129	0.636
外向T得点				3.047	0.051	0.051		
介入群	64.25 (9.18)	61.20 (9.62)	60.50 (7.75)				0.020 *	0.003 *
対照群	62.05 (8.71)	62.45 (8.92)	60.75 (7.30)				0.730	0.040 *

T1: Time-1, T2: Time-2, T3: Time3　　介入群 (n = 20), 対照群 (n = 40)　　* $P < 0.05$, ** $P < 0.01$, *** $P < 0.001$

2） 考察

① COSP は ASD 児の母親の養育効力感を高め、精神健康度を維持しつつ、わが子の行動と情緒の問題の改善の実感をもたらし、その効果は介入終了１年後においても持続することが確認できた。この結果は、ASD 児のアタッチメント欲求に対する養育者の敏感性を高める支援法の有効性を支持しており、今後の ASD 児への早期介入の有効性を支持する知見を得ることができた。

② 介入終了後 6 ヶ月時の調査で、母親の精神健康度が介入群は改善、対照群ではむしろ悪化した。この結果は、ASD 児に対する通院、療育などのケアに加え、その養育者のメンタルヘルスを支える子育て支援が必要であることも示唆している。

③ COSP を ASD 児と養育者に適用する際にオリジナル COSP に追加した独自の取り組みは、効果に影響を与える重要な要因となったことが考えられる。第一に、事前アセスメントを実施したことにより、支援者が親子の実態を把握でき、各セッションの内容を個々の実態に結びつけて解説したり、養育者の語りを共感的に聴いたりすることができた。第二にプログラム終了後のフォローアップの実施は、プログラム終了後も支援者を安全基地として再確認することにつながり、養育者としての自律的な成長を促したと考えられる。COSP の本質的な内容を変えなくてもこれらの工夫によって ASD 児親子への効果的な実践が可能であるという示唆は、今後の臨床実践において重要である。

④ 実際の関わりが改善し子どものアタッチメント安定性を高める効果があること、それが子どもの発達促進につながることを検証すること、およびより広範な実施にむけて効果を高めるための実施方法、既存の支援プログラムとどのように関連づけるか検討することが今後の課題である。

＜文献＞

1. Bowlby, J. Attachment. Attachment and loss. Vol.1. Basic Books, NY, 1969. (revised ed., 1982)（黒田実郎（訳）『母子関係の理論 1-愛着行動』新版、岩崎学術出版社、1991）
2. Capps L, Sigman M, Mundy P. Attachment security in children with autism. *Dev*

Psychopathol. 1994; **6**(2): 249-261.

3. Rutgers AH, Bakermans-Kranenburg MJ, van Ijzendoorn MH, et al., Autism and attachment: a meta-analytic review. *J. Child. Psychol. Psychiatry* 2004; **45**: 1123-1134.
4. Rutgers AH, van Ijzendoorn MH, Bakermans-Kranenburg MJ., et al., Autism, Attachment and Parenting: A Comparison of Children with Autism Spectrum Disorder, Mental Retardation, Language Disorder, and Non-clinical Children. *J. Abnormal Child Psychol*. 2007; **35**: 859-870.
5. Oppenheim D, Koren-Karie N, Dolev S, Yirmiya N. Maternal insightfulness and resolution of the diagnosis are associated with secure attachment in preschoolers with autism spectrum disorders. *Child Dev*. 2009; **80**(2): 519-527.
6. Oppenheim D, Koren-Karie N, Dolev S, Yirmiya N. Maternal sensitivity mediates the link between maternal insightfulness/resolution and child mother attachment: the case of children with autism spectrum disorder. *Attach Hum Dev.* 2012; **14**(6): 567-584.
7. Oppenheim D, Goldsmith DF. Attachment theory in clinical work with children: bridging the gap between research and practice. Guilford Press, NY, 2007.
8. Yirmiya N, Shaked M. Psychiatric disorders in parents of children with autism: a meta-analysis. *J. Child Psychol. Psychiatry*. 2005; 46(1): 69-83.
9. Cooper G. Hoffman K. Powell B. *Circle of Security Parenting. A Relationship Based Parenting Program Facilitator DVD Manual 5.0.* Circle of Security International, Spokane, WA, 2009.
10. Huber A, McMahon C, Sweller N. Improved child behavioural and emotional functioning after Circle of Security 20-week intervention. *Attach. Hum. Dev.* 2015; **17**: 547-569.
11. Yaholkoski A, Newton Montgomery JM, Stoesz B, Piotrowski A, Assessment and diagnostic practices for autism spectrum disorders: A survey of clinicians in Canada. *J. Dev. Disabil.* 2021; 26(1): 1-20.
12. 北川恵、安藤智子、松浦ひろみ、岩本沙耶佳（訳）:「「安心感の輪」子育てプログラム」認定講師用　DVD マニュアル日本語版 1.0. 2013.
13. Kitagawa, M., Iwamoto, S., Umemura, T. *et al.* Attachment-based intervention improves Japanese parent-child relationship quality: A pilot study. *Curr Psychol.* 2022; **41**: 8568-8578.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Kubo N., Kitagawa M., Iwamoto S., Kishimoto T.	４．巻 -
２．論文標題 Effects of an attachment-based parent intervention on mothers of children with autism spectrum disorder: preliminary findings from a non-randomized controlled trial	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s13034-021-00389-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 久保信代	４．巻 26
２．論文標題 アタッチメント（愛着）と自閉スペクトラム症	５．発行年 2021年
３．雑誌名 最新精神医学	６．最初と最後の頁 209-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 島井哲志　久保信代	４．巻 69
２．論文標題 ポジティブ心理学からみた親子の発達支援	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育と医学	６．最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北川恵	４．巻 23
２．論文標題 アタッチメント理論をベースにした親子への介入の実際	５．発行年 2021年
３．雑誌名 子どもの虐待とネグレクト	６．最初と最後の頁 136-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kitagawa, M., Iwamoto, S., Umemura, T., Kudo, S., Kazui, M., Matsuura, H., & Mesman, J.	4．巻 -
2．論文標題 Attachment-based intervention improves Japanese parent-child relationship quality: A pilot study.	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Current Psychology	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-020-01297-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 久保信代・北川恵・岩本沙耶佳	4．巻 20
2．論文標題 アタッチメントに着目した自閉スペクトラム症児と養育者に対する親子関係支援　―分離不安を呈していた8歳男児と母親の親子関係の変化-	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本サイコセラピー・薬物療法学会	6．最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保信代	4．巻 22
2．論文標題 自閉スペクトラム症児との関わり	5．発行年 2019年
3．雑誌名 チャイルドヘルス	6．最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北川恵	4．巻 22
2．論文標題 子どもの「安心基地」になる	5．発行年 2019年
3．雑誌名 チャイルドヘルス	6．最初と最後の頁 10-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保信代	4．巻 16
2．論文標題 自閉スペトラム症を有する子どもと養育者の関係支援 -アタッチメントに視点をおいたアプローチの実践-	5．発行年 2018年
3．雑誌名 関西福祉科学大学心理・教育相談センター紀要	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北川恵	4．巻 199
2．論文標題 育児困難を支える親子関係支援の実践－誰もが「安心感」を求めている	5．発行年 2018年
3．雑誌名 こころの科学	6．最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北川恵	4．巻 49
2．論文標題 親子関係支援から見たアタッチメント	5．発行年 2018年
3．雑誌名 心と社会	6．最初と最後の頁 82-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北川恵	4．巻 17(4)
2．論文標題 アタッチメントに基づく介入	5．発行年 2017年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北川恵	4．巻 71(11)
2．論文標題 子どもを必要以上に叱ってしまう親－虐待の未然防止を考える	5．発行年 2017年
3．雑誌名 児童心理	6．最初と最後の頁 970-974
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 北川恵	4．巻 376
2．論文標題 大学で行う親子関係支援－次世代育成研究拠点形成を目指して	5．発行年 2017年
3．雑誌名 大学時報	6．最初と最後の頁 114-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計34件（うち招待講演　2件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 北川恵，久保信代，岩本沙耶佳，安藤智子，河邉真知子，宮口智恵，松波朝子，岡野典子，久保樹里
2．発表標題 「安心感の輪」子育てプログラムの実践と課題：幅広い現場で様々な対象者への効果的な活用に向けて
3．学会等名 日本発達心理学会第34回大会（ラウンドテーブル）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Kubo, N. Kitagawa, M., Iida, J., Iwamoto, S., Makinodan, M., & Kishimoto, T.,
2．発表標題 One-year follow up study on attachment-based parenting intervention’s effects on Japanese mothers of children with ASD.
3．学会等名 International Attachment Conference（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 島井哲志，堀毛一也，久保信代，阿部望，宇野茂利
２．発表標題 ポジティブ心理学：応用研究の最前線（３）
３．学会等名 日本心理学会第86回大会（公募シンポジウム）
４．発表年 2022年

１．発表者名 久保信代,飯田順三,北川恵,岩本沙耶佳,牧之段学,岸本年史
２．発表標題 自閉スペクトラム症児の養育者に対するアタッチメント理論に基づいた親子関係支援：非ランダム化比較研究による効果検証
３．学会等名 第62回日本児童青年精神医学会総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 島井哲志・谷向みつえ・久保信代・宇惠弘
２．発表標題 ポジティブな子育てを支える養育者の特性（１） 主観的幸福感と人格的強みについて
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷向みつえ・久保信代・宇惠弘・島井哲志
２．発表標題 ポジティブな子育てを支える養育者の特性（２） ケアギビング・システムとの関連から
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 久保 信代，宇惠 弘，谷向 みつえ，島井 哲志
２．発表標題 ポジティブな子育てを支える養育者の特性（３）子育て効力感との関連から
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宇惠弘・谷向みつえ・久保信代・島井哲志
２．発表標題 ポジティブな子育てを支える養育者の特性（４）身体接触との関連から
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 北川恵
２．発表標題 アタッチメント理論の臨床的活用
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会第27回学術集会かながわ大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 久保信代、谷向みつえ、木村志保、宇惠弘、島井哲志
２．発表標題 乳幼児の母親の子育て幸福感に関連する人格的強み　（１）
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷向みつえ、久保信代、木村志保、宇惠弘、島井哲志
２．発表標題 乳幼児の母親の子育て幸福感に関連する人格的強み　（２）
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宇惠弘、谷向みつえ、久保信代、木村志保、島井哲志
２．発表標題 乳幼児の母親の子育て幸福感に関連する人格的強み　（３）
３．学会等名 第10回総合福祉学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 久保信代、島井哲志、宇惠弘、谷向みつえ
２．発表標題 インターネット・ゲーム依存傾向の検討（１）　　母親の実態とその特徴
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 島井哲志、宇惠弘、久保信代、谷向みつえ
２．発表標題 インターネット・ゲーム依存傾向の実態　（２）依存傾向とポジティブ心理要因の関連―
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宇惠弘、久保信代、谷向みつえ、島井哲志
２．発表標題 インターネット・ゲーム依存傾向の実態　（３）母親の成人愛着スタイルと依存傾向
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷向みつえ、島井哲志、宇惠弘、久保信代、
２．発表標題 インターネット・ゲーム依存傾向の実態　（４）子どもの依存との関連―
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kitagawa, M., Iwamoto, S., Umemura, T., Kudo, S., Kazui, M., & Matsuura, H.
２．発表標題 The circle of security parenting program and individualized video review improve Japanese parent-child relationship quality.
３．学会等名 Biennial meeting of the international society for the study of behavioural development（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 北川恵
２．発表標題 タッチメント理論に基づく親子の関係性支援
３．学会等名 日本赤ちゃん学会第20回 学術集会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 北川恵
２．発表標題 日本における「安心感の輪」子育てプログラムの成果と課題
３．学会等名 日本子ど も虐待防止学会第26回学術集会いしかわ金沢大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 久保信代・谷向みつえ・木村志保・宇惠弘・島井哲志
２．発表標題 乳幼児の母親の子育て幸福感に関連する人格的強み（1）
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷向みつえ・久保信代・木村志保・宇惠弘・島井哲志
２．発表標題 乳幼児の母親の子育て幸福感に関連する人格的強み（2）
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 久保信代・北川恵・岩本沙耶佳
２．発表標題 自閉スペクトラム症児に対するアタッチメントに着目した親子関係支援-分離不安を呈していた8歳男児と母親の親子関係の変化-
３．学会等名 第20回日本サイコセラピー学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木下雅弘・野崎優樹・北川恵
２．発表標題 大学生におけるアイデンティティ発達と養護性と の関連
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 近藤清美・久保信代・篠原郁子・尾崎康子・黒田美保
２．発表標題 自閉症支援において親子の関係性の何を支援すべきか　（シンポジウム）
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kubo, N. Kitagawa, M., & Iwamoto, S.
２．発表標題 Effectiveness of the Circle of Security Parenting program for mothers of children with Autism Spectrum Disorders: A case study with 12 dyads.
３．学会等名 16th World Congress of World Association for Infant Mental Health（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kitagawa, M., Iwamoto, S., Umemura, T., Kudo, S., Kazui, M. & Matsuura, H.
２．発表標題 Does child attachment change after Circle of Security Parenting program and individualized video review sessions?
３．学会等名 16th World Congress of World Association for Infant Mental Health（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Megumi Kitagawa
２．発表標題 The circle of security program and the circle of security parenting program: Our experience with Japanese families.
３．学会等名 JSDP International Workshop（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 北川恵・久保信代・酒井佐枝子・榊原久直・河邉真知子・金城志麻
２．発表標題 「安心感の輪」子育てプログラムの実践と効果研究　（ラウンドテーブル）
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 久保 信代・奥村 貴子・宮﨑 義博・岩坂 英巳
２．発表標題 学校不適応、攻撃行動を呈するADHD児への心理社会的治療の症例報告
３．学会等名 第58回日本児童青年精神医学会総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 梅村丘比・岩本沙耶佳・北川恵
２．発表標題 日本のStrange Situation法分類の割合について－乳幼児の年齢に焦点を当てた検討－
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 鶴本容子・北川恵
２．発表標題 1歳児のアタッチメントと母親のemotional availability（情緒的利用可能性）
３．学会等名 日本乳幼児精神保健学会第20回学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 岩本沙耶佳・北川恵
２．発表標題 母親による子どもの内的状態理解と養育行動との関連について事例検討
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会第23回学術集会ちば大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 竹田伸子・久保信代・榊原久直・深津千賀子
２．発表標題 アタッチメントと精神分析　ー ボウルビィとウィニコットの母子関係理論の出発点を温ねてー　（自主シンポジウム）
３．学会等名 日本心理臨床学会第36回秋季大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 竹田伸子・久保信代・加藤郁子
２．発表標題 子どものアタッチメントと育ちを守り、情緒的養育環境をケアする工夫　ー「安心感の輪」子育てプログラムの実践からー　（自主シンポジウム）
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会第23回学術集会ちば大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計8件

1．著者名 久保信代	4．発行年 2022年
2．出版社 誠信書房,	5．総ページ数 430
3．書名 第14章この先の課題　in 数井みゆき・工藤晋平　（監訳）「人間の発達とアタッチメント」	

1．著者名 久保信代	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 264
3．書名 認知行動療法、応用行動分析、その他の心理療法、公認心理師資格について in 宇惠弘、多田美香里、木村志保 「心理学と心理学的支援(最新はじめて学ぶ社会福祉②)」	

1．著者名 久保信代	4．発行年 2021年
2．出版社 じほう	5．総ページ数 376
3．書名 子どもと親の特性に応じた工夫　虐待予防の観点から　in 岩坂英巳（編）「困っている子をほめて育てるペアレント・トレーニングガイドブック第2版」	

1．著者名 遠藤利彦（編著）、本島優子・中尾達馬・大久保圭介・石井悠・北川恵・平田悠里・篠原郁子・金政祐司・数井みゆき・堤かおり・森田展彰	4．発行年 2021年
2．出版社 日本評論社	5．総ページ数 251
3．書名 入門アタッチメント理論：臨床・実践への架け橋	

１．著者名 久保信代	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 224
３．書名 アタッチメントに視点をおいたアプローチ　in 小口将典・得津慎子・土田美世子（編）「子どもと家庭を支える保育」	

１．著者名 久保信代	４．発行年 2017年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 234
３．書名 自閉症を抱える子どもと親の関係支援 in 北川恵・工藤晋平編著「アタッチメントに基づく評価と支援」	

１．著者名 北川恵・工藤晋平	４．発行年 2017年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 234
３．書名 アタッチメントに基づく評価と支援	

１．著者名 北川恵	４．発行年 2017年
２．出版社 岩崎学術出版社	５．総ページ数 280
３．書名 サークル・オブ・セキュリティ・プログラムと「安心感の輪」子育てプログラム in 青木豊・松本英夫編著　「乳幼児精神保健の基礎と実践：アセスメントと支援音ためのガイドブック」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	北川　恵 (Kitagawa Megumi) (90309360)	甲南大学・文学部・教授 (34506)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関